

## 2016年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 国際学部・教授・榎本 悟

研究課題：日本企業の経営戦略の研究

研究期間：2016年4月1日～2016年9月19日

### 研究成果概要

上記研究課題を申請したときには、日本企業の新興国戦略の見直し、先進国での経営戦略の実態ならびに、グローバル・バリュー・チェーン（GVCs）分析を用いた日本企業の世界のなかでの立ち位置を研究するためであった。

しかしながら、上記の研究課題を達成するには、その担い手である“人材”の問題を避けて通ることができないということに思い至ったため、「日本企業の経営戦略の研究」というテーマの中の人的資源管理（グローバル・ヒューマン・リソース・マネジメント、GHRM）に焦点を当てて、研究することにした。特にわが国でかまびすしく論じられている“グローバル人材”について一度原点に立ち返って研究することにした。

グローバル人材について著者は既に、特別研究期間に入る直前の2016年3月に国際学部の紀要である『国際学研究』第5巻第1号にて、「グローバル化で求められる能力」として発表している。それをベースにして、より一層の展開を図ることとした。その結果、2016年8月20日、国際ビジネス学会・北海道・東北部会（北海道大学）に於いて「日本の“グローバル人材”を考える」というテーマでその後の研究の進展を報告することができた（添付資料参照）。このときの報告要旨を参考までに示すとすれば以下の通りである。

グローバル〇〇はわが国における一種のはやり言葉である。曰く、グローバル人材、グローバル企業、グローバル競争、グローバル市場などなどである。なかでも、わが国の国際競争力を強化するために“グローバル人材”をいかにして養成するのか、そのために必要な英語力、とりわけ会話能力の強化があらゆる利害関係者（ここには、政府、企業、研究者（大学）だけでなく、これからの“グローバル人材”を担うと期待されている学生、そして父兄などが含まれている）の間で切望され、強調されている。

本発表は、既存の文献に依拠しながら、第一に、“グローバル人材”をめぐるわが国政府、企業の経営者、そして研究者の考え方を検討し、多様な考え方が存在していることを示し、時には“グローバル人材”に対するあまりに高いハードルを課したり、場合によっては、真逆の意見も存在するなど、一致した見解が存在しているわけではないことを確認する。

第二に、わが国企業が直面するグローバル化の現実の中で、“グローバル人材”としてどのようなことが要請されているのか、企業側の人事採用担当者の側、ならびに学生の側で自分（あるいは学生）が欠如していると思われる能力について、双方に非常に大きな認識ギャップが存在していることを確認する。そしてこうしたギャップをそのまま放置することの

危険性と、ギャップを埋める迅速かつ強力な対応がますます必要になっていることも確認する。

続いて、現在わが国が力を注入している英語力の強化、すなわち“グローバル人材＝英語”という考え方は本当に“グローバル人材”を養成することに寄与するのだろうか、あるいは英語を話せるということは一体何を意味するのか、そして、“グローバル人材”の議論全体を通じて、その底流に横たわるいくつかの問題点を描き出すことによって、今後の議論の参考にしたいと考える。

本発表は、既に述べたように、既存研究を利用したサーベイであり、こうした議論をさらに進めるためには、日本以外の国々で“グローバル人材”をどのように定義し、それに向かってどのように推進してきたのか、あるいは推進しているのかという研究調査を必要とする。加えて、先に指摘したように、なぜわが国では、利害関係者の間に“グローバル人材”について異なる考え方が存在しているのか、その理由を研究するために、利害関係者それぞれについて、大規模な実証研究を行い、それを理論化することが必要になる。しかも、そうした研究作業はわが国において喫緊の課題であると考えられる。この研究作業を迅速に実施し、その結果を踏まえて、政策に反映することが必要であろう。そうすることがなければ、膨大な資源や努力を傾けても、無駄な投資に終わることを危惧する。

以上が報告の要旨であるが、グローバル人材養成の一翼を担うはずの大学が、文字通りグローバル人材養成に努力していても、必ずしもそれが功を奏するかどうかははなはだ疑わしい。上記報告でも論じたように、グローバル人材とは何か、グローバル人材を養成するための現行のカリキュラム体系で適切なかどうか、わが国だけでなく、世界の国々がどれだけの注意を払ってグローバル人材を養成しようとしているのか、といったことを真剣に検討・考慮して、そうした人材を養成するためのあらゆる手立てを早急に講じなければ、いつまでたってもその成果を生み出すことはできないし、他の国に追いつかれ追い越されることになると考えられる。

幸い我が大学はスーパー・グローバル・ユニバーシティ（SGU）に選ばれた大学の一つであり、何よりも率先して、大学としての形式と内容を早急に整えることが必要とされる。そうしてこそ“個性”ある大学として認知され、他大学との差別化につながると考えられる。なお、グローバル人材に関する研究は現在も続けており、その成果の一端を国際学部紀要で発表しようと考えている。